俄羅斯紀聞外編 續

ル 8
2994
37

ル 37
3038
37
特
ル 8
2994
37

拂菻新聞

文政九年丙戌四月和蘭甲比丹ヘ左ルレル對話集記

今ヒ左ル事三十三年ノ昔寛政六年甲寅ニ當ル拂菻國ハ一極盛ヲ極メ世ヲ超越セリ元用拂菻ニローデヒイキ十六世ヲ云フ

拂菻國ノ開祖拂菻斯ヨリ六十六代目ニローデヒイキ十四世王ヲ云寛永十五年ニ生レ七歳ノ時威名隆盛ヨリ十六世王ハ十四歳ノ孫ヲ以テ當テ五諸侯カヒ長ヒテ拂菻國ヲ治ム拂菻ニ五侯地ヲ分テ分ヤ一統ノ大將ヲ戴テ一統ノ平ケ五侯一統シテ國ヲ治ム五侯互ニ地ヲ爭ハンヒテ

軍を統し或ハ隣國と戰ひ國を二十餘も取たる
より先其の二男子ボナハルテと云若者ニ親の名を因
（歐匠の子なり名ハナポーレントと云遂子ロデウェイキ十六世王ヲ弑し今おさまる
に大臣ルレルト始說／幼年の時コルシカ島（地中海ニ有リ仏郎察ノ領）の
守となりたる）
学校に學で兵略に通じ殊に佐ても物かきし人
なり英雄豪傑兵を用る事神の如し先比
日夜に至て切處へ意太里亞國を取りより佛
郎察に至て五人の諸侯を戰て悉く是を臣とし自
立して王となり（佐十郎ハ話ニ自ラ称して ロデウェイキ第十七世王と云）實に八百

跋

四年と為へし（文化元年甲子に當る）東の方三十六國
獨逸を取り西の方伊斯把泥亞を破て是を臣と
なし佛郎察に從て獨立する（ゴロウヰンの話には羅瑪帝を稱す）
平けて權勢を此時帝号（悉く亞墨利加の伯西兒に逃去る又撤鉢泥亞王（國王は））
鉢泥亞王と乃名を伊斯把泥亞王を以て諳厄利亞の
國々も和蘭國王とし和蘭ハ佛郎察の國となりしかば
諸侯十七州を併せて封せし所謂和蘭の國主國に列せ
ざれハ思ふ事能はず何れへ逃亡しや甲比丹呼ぶ事を
されど和蘭の商館ハ獨さ行て諳厄利亞に属しける事

姉聟耳（ゼツ）ヤ及ナーブルの王ボナパルテ
の子ヲ以テ羅馬の太子ト為シ又オ[illegible]人事
たるヲ以テ其ヲ無ク[illegible]瑪ヲ左宮ヲ拝シテ陸軍大臣ト為セリ
[illegible]実ニボナパルテ[illegible]ヲ以テ[illegible]
古今未ダ有ラザル[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]
（[illegible]の歴山帝国の[illegible]）
（[illegible]）
[illegible]ヲ[illegible]
アルコーラ[illegible]ボナパルテ軍ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]

パルテ一騎馬ヨリ跳ス[illegible]
大占[illegible]軍ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]
の孤兵[illegible]
[illegible]侵シ[illegible]
百人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

のみく大事件を丹者に束縛して
幾許の人数を殺し軍を五きんをまるを俄ロ
敗人民を大事を
拙策を以て勢五万を落ちて
と伝聞の人を對戦まで結局の仏列に
を苦しと賜く
伝へ
国兵を合せ
ワートルローの大戦
六月十六日
ラーニイ
し又ワートルロー
う用ひ
題
右
当時
ブロンホフ
七州の
し山
大

トルコ勝利度ハ十七州一位の王國ヲ奪ヒ
ヲ[illegible]

四月二日　　元周造ス

四月二日夜質問

一拂郎西の一撰擊ハ虐政の始ヲ
一伊斯把尼亞の國主父子[illegible]中和ヲ[illegible]日完
起リ父ハ嘉太里亞ハ逃去リ子國ヲ奪ヒ[illegible]
ナポレオン橋ヲ拂郎西ヘ送テ獨ヨ[illegible]ク出發大
乳治手の後出ル伊斯把尼亞ヘ帰ルヲ成ス
ヲ[illegible]
一ポナパルテの親ハ目苦方の上位ヲ[illegible]
一拂郎西代ハ世攻[illegible]柄の者ナアーバルニエボナパル

世藝官

たり拂ひ敵を奮ひ戰ひ遂に敵アードルを押込め
ゝ已に敵下軍船の人々アードルを
[illegible]

一ボナパルテより軍を起すや先エルシカ島より折て出
ニルダ島を拂ひ地中海を渡り泥日多を渡らんと
するに早く諸心利無人軍艦を備へて之を侯
ひボナパルテ風雨の勢を冒し油断なく自己
忽ち船を進めて阿日多を渡り遂に敵を軍を安
彼諸民所要の軍務を追ひまくられ或ハ殘打

ち殺され敗走せり

一ボナパルテより俄羅斯を侵せしハ一度ハ波羅泥（ポーレン）
亞より四里ハ二度ハ俄羅斯を侵ポーレン
の地を奪れたり

一ボナパルテ[illegible]の軍船飛ぶを苦しと引退く
た果て俄羅斯人追ひ[illegible]ポーレンの地を奪ひ
ポーレンサキセンの軍船事務切してボナパルテ[illegible]三國
と戰ひ遂に敗走せり

一ボナパルテ[illegible]和蘭の勇者ハ（ホハトポレ ヨンゲレスニ出る）[illegible]（ヨンローテ）

そ古封して和蘭國王には此王國人と和
睦して和蘭は唐事能はず遁て拂郎察に
仮寓す

一 ボナパルテ伊斯把尼亜を切取其王を擒にして
國へ送り、其跡へ己が兄ヨセフナポレヨンを以て王とす

一 ボナパルテが妹聟シシリヤとナーブルスの國王なりとぞの名をヨワツヘムミ
エラと云

一 一揆起て教を破し拂郎察の王は名をローデウェイ
キ第十六世と云、其子ローデウェイキ第十七世其時
十四才にて獄中にて死去 後十年の後子はボナパルテ自ら十七世王と称して
自立しローデウェイキ第十七世王と自ら称しよし、此風説は
誤なるべし。ロ相十六世王の教を破し時其子一旦王位
を付し故に十七世王と名づく。然るに又は位に就き亡太子
ある故前位の内よりローデウェイキ十七世と名づけ然
ボナパルテ亡て後今王位に即く。是ぞローデウェイキ第
十八世王と云 是王は第十六世の次男なりや

一 諳厄利亜の太子の事 文化中 女子一人生男子なし
故に和蘭の王ウイルレム第五世の子プリンス・ハン・
オラーニイー ロートルの義子后を求めし プリンス王とは世子の称号なり 時遁去て諳厄
利亜に来寧しゆへ嘗て客として彼女子配さん

と宣べしより世大乱起りワートルローの一戦み大
利を得て和蘭を豊臣吉の子孫東十四
ヶ国を領せ信長利を伸
ら事乃和蘭より出て
一世と称せし人皆三百年以前ハプスブルク家ハ一族国王ウイルレム第一世と云
人ハ初て王国を列せしウイルレム第一世子孫ハ代々陸る事百年の程なり
世ハ王ハ多くの女を信長より
去人を信ず弱く世を
小者を事
しあるべし

和蘭の前王ウイルレム第五世今の父ハ
信長利を失ひ土人猶独立を
○ナポレオン和蘭を信長利西の
の内を分ち伊太利の新好
一オラーニエ、サスナウ、世を去り右と古へ高位
人の姓名
一蘇仁齊(スウエーデン)の国王ボナパルテ於ての敗軍の者ハ
ナ世貴て已り者を
者より敗後
姓なり
ナ人ワートルローの戦ナ
て敗て

魯西亜人ハ退キ
ましま

一ボナパルテ最後の大戦ハエンゲル、プロイス、和蘭プリ
スウェイキ　此ハ伯三国の国也三国和蘭を助けて戦ひ
スウエシヤ
給軍海て　スウエシヤ
刈りしを　を対陣ス　千八百十五年六月
十二日プロイス、ト決戦十五日の初夜より軍勢を出ハ
但ボナパルテ伏　ワートルローより七八里の地の由
兵を率ル　プロイス打負ス十七日ニ五万傷
負フ十八日ハ決戦ス敵あくまて
伏せ兵して　ボナパルテ　エンゲル
軍勢を長ハ

和蘭の二国ト決戦ス　の掠奪ス時何故
ロシヤ欧羅巴諸国の人一白三合ヤ　入尓馬尼正伊斯地尼正
ドあ国まして承あ居ル
一扨ボナパルテ敗北して後ヨ却て集ボナパル
テ　ボナパルテ　馬数ヨ　引ル　ト走ル
イトの人馬ガ　改る車の隙より人ハ引出
ヒ　ヒ　ハ車の　ヒ　ヒ　ヒ
車百二十里半　パリイス、フランスの都へ出掛る
出ずして事危急ス　ボナパルテ進出於里川
左隔て陣ヒ　ボナパルテ　ヒ　ヒ　ヒ

事なるを以て先ハ已ハ陸路の言ひ敵軍早速にて海
岸へ逃て王室エンゲルの船に乗り新十被伯
へと逃るを待居りしハエンゲルに降らんと
思ひエンゲルの軍船ノールドにエンボルト船名見て
一数十隻へ乗り移り彼心中とエンゲルに降
らバロンドンに将て虜て居ると思ひ
去ハ早くてエンゲル人ボナパルテヲ捕へ本國へハ
送られまして聖ヘレイナ島へ送ると
せり

一右大和浜軍一校敵艦已諸國を討
ト合想定之ハ華しきを知一歩せんと
あらハ諸國集て一時に打崩さんと也此の如く
ならハ浜を決して我の起る事ハ疑
論なし

一衣冠の制度ハ右改革ハ第諸國共に改革し
よりの事なれハ肩先きに徽章を付く俄
我の制の如し　先ハ俄に改革せしハ如何
ハ時に改まる事之今も
不ハ長ハ名

左の胸の辺へ銀の星を
付るなり 法星

四月四日夜雨質問

一銅版を用ゆる事を上の仕方あるを来
用ひ法を其上をするハ菊苣安列り此方菊
苣幹を焼て性を[illegible]アニミンを大量飛定き
ニトレペンテイーン
安を磨きる事を極安きを
油或ハ水を大量絶し浸初め 渡見り及ばざる
[illegible]

一四國の三輪明神の蔵の書 石板を於の時
吧へ逃へ去り出板を書し出を味噌

一鉄刻の方二法あり エッチニン腐蝕 とガラヘール鍍鍍

之板まを銅スペッキ・ステイン（磁石のおなり）ハ勿論荷ま板
たま用ハ但寸法の事ハスペッキ石ヲ用ひたハる
粗ま出来すま板ヲ
拓方　先紙ヲ濡し紙ヲドウサたる引くハ事　重紙を用ひる事の
仕方ハ細ま問され世ま
ハ別ま仕方ハ有まず　荷ま板ニまを矢張り軽軟
なれ拓る之稍しヲ劣てを嬉る事ヲ事ヲ一家
たを拓く推
えまを忽ち壊る事れ世　拓旅ま
カの為ヲ拓沸して正事ヲ事ヲ
一焼物の事ハ　カルクワールデたを用ひを焼物の方ハ
日本より支那へ伝ヲ支那より西洋ヲ伝

ヲ伝たを西洋ヲ
拓ますま一万ヲの陶器ハ何国ヲを
ま論ずを焼ま我ますを今利年ヲのを経ヲ
ま焼ちしを欧州の江戸
云事ハ我ま
欧住ヲ出ヲ
ヲ用の品ヲ
ハ国
登南を焼
物ヲ欧乙焼ヲ
ヲ中ヲ出ヲ

今ハ西洋の焼物ヲ
せしむ者く用たを驚ま品ヲ
一拓長崎の一焼たを平ヲ　五諸侯の名ヲ
バテスと云外ヲ人の名ヲ忘ヲ
一ボナパルテヲ　擯せられし伊斯把尼王の名ハ
ナンドと云ヲ正又ヲの名ハ美えば

一拂郎国の今王たカロル児子十世と云ふ

ローデ王イキ十六世　千七百七十五六年の比即位
千七百九十三年正月一族の為に
首を刎ねる

十七世ノ弟
ローデ王オキザセ世　王位に即く時才にして死せし年
十四才

物すきに依て家昔たれらさるあ
十七世のローデ王イキて以来
るを聞るに思ふに一旦五諸侯の為
に位を立られ間もなくドナパルテに
擯せられて終に死せしよし聞
や

同じ
ローテ王イキ十八世

南成年より
二千八百三十年

カールル第十世　今の王ナリ
物ずきな人カールルと称する事有ぬや

一語尼利亜の人王ッジョルで第四世と云ふ猶逆節国
より養子に来る王子世人ともの称ハプリンスンロルレス
と云
是ハ和蘭の今王世に仕へ時に天子に乳
母を取て語尼利亜に在る語尼利亜の女
女子一人あり男子を七人あり和蘭の去よと

聞ゆる世に於ては和蘭豊後せ
ま彼等まと成程なる事を始め今まで
イツより書を二度送りしと
一波尔杜瓦尔王船を以て ボナパルテの為に伯西児へ逃
く今八國と怖を生ず 風説を苦合也
一ボナパルテ歐羅巴三分の一を平定す 桜井詰尼利亜 伊太利 歐羅
已前是格等ヲ除キ其外大抵押
伏せしめ多年此時帝と称せ
一ボナパルテ幼児拾人を合八百名を以て
敵人を殺せ 於ての者少せり合まりのこ
ろ
一抑和蘭王限りまの城を強固に
告ぐ
一王國プロイセン八人尔馬尼亜の満屋なり 米国 是云
の従日和蘭詰尼利亜まつ
一和蘭のウイルレム五世の妻ハプロイセンまの妹なり
一和蘭の今まの世まの妻八俄羅斯より来り
娘まアレキサンデル帝の
女なりしく語らず
一詰尼利亜と普国生まれ八達係十り

一諸侯利亞の前ゟ和蘭の学ゟ人の和蘭葉を養ゟ
ゟ人こせしへハ親ゟ親族ゟ猶ゟ
拘ゟ比事ゟ尋ゟ猶ゟ者ゟ学ゟ
すゟゟ程ハ学ゟ年ゟ学ゟ五ゟ婚姻
あゟゟ根ゟゟ和ハ猶ゟ五ゟ
無ゟて語ゟゟ
保ゟエンゲルゟ和葉ゟハ此年ゟ我ゟゟ事
何ゟ文化如ゟ年我ゟ場ゟ蘭人ゟ語ゟ
五ゟゟ見ゟ正度蘭ゟエン

ゲルゟ和時何ゟて出ゟパルニの乱ゟ起て学ゟ
エンゲルゟ斗ゟ
何ゟハ

配

ゟ人ゟ百ゟ残ゟの事ハ

丙戌紀聞

歐羅巴諸國迚こ為大ゟ孔ま〜ゟ赤最後沿平とゟり〜

形勢いろふと尋るふ波沙我寛政の初佛郎察國ロッテウエーキ

第十二世ゟの代ゟ為りて（按こ佛郎察國の始祖佛郎哥斯より二十二代の孫と
ロッテウエーキ第十四世ゟとゟ代ゟの時威名隆盛なり）

〜由而史ゟえ而代第十二世ゟ
其十四世ゟの孫ゟろ〜〜〜政令ゟ〜〜〜ゟ國民苛虐ゟ堪へすして遂

城蜂起せ〜〜しゟ諸有司も制すること能はす一ゟ七百九十三年正

月（按ゟ我寛政五年十二月の文）迚ゟ遂ゟ城等の為ゟ殺せらる（佛郎察いまゟの城迚ゟあひ〜ハ間より病

んて死せ〜〜ときゝ（ハと
みて代邸ゟ若すゟ捷ゟ）附ゟ養ゟ五人の諸侯あり一人の名をバラスこゝゟ二人

の名は記〜〜將すゟ代ゟ侯力と戰せ〜〜城壘と討〜〜ゟと平け名一

ばしてまことに始めうちたかれらも（按ずるに地とかく）相互に地と度めんとて
又軍事起り遂に濠洲と戰ひ西洋なる人数を失ひ
盧的那撥列勇（ルテナポレヨン）と云ふ者有りこれ父は波蘭判官の下吏なり那撥
列勇は幼き時哥尔西加（ユルシカ）島の（按ずるに地中海中なり）
て生まれ生まれて初て仕へ濠洲を攻めうちとりて
と起り先に哥尔西加（ユルシカ）島と奪ひ取て馬兒太（マルタ）（按ずるに地中海中なり）
と西の遠く阨入多（エジト）國に渡りて攻戰んとす（按ずるに阨入多は亜弗利加洲の北部なり）
諳厄利亜（インゲリア）人を焼き殺せり大に敗をせり那八盧的（ポナパルテ）
巖なり那八盧的（ホナパルテ）風雨の勢にて軍艦を備へ後を守備
忽ち形裝ひして阨入多（エジト）に渡りぬ之を聞て諳の濠洲軍
艦諳厄利亜（インゲリア）人を焼き殺せり大に敗をせり那八盧的（ポナパルテ）
阨入多（エジト）人那児格（ルコ）人と戰てこれに勝ち阨入多（エジト）と奪ひ
意太里亜（イタリア）を奪ひ（按ずるに伊西斉里亜（シリア）迫傍の地なり）アルコーラと云ふ橋
あり意太里亜（イタリア）人橋の軍たちし銃を伏せ大軍の橋を渡
らんとする者と雨のごとく運送せり那八盧的（ポナパルテ）の勢を
霧のごとく流るる遠巡して那八盧的（ポナパルテ）一騎馬に鞭て
銃丸流るるごときの橋上を駆け過ぎて大勢と殺して士卒を励
すに大軍力を得て遂に意太里亜（イタリア）を

而り始められり佛蘭察より出でる諸侯と稱して尽くこゝを亡
―按ずるに佛蘭察世説の貴族とアンドルとラポナパルテ
皆是と爲し―こゝ以下とゝ以てアンドルとせ―とし自立―て王たり
実に一千八百四年と号へ―按ずるに文化元年なり前王の弟
十七歲なり―佛蘭察の東南より入尔馬泥亜和蘭孛漏生波羅泥亜
て辛すと 第那瑪尔加・蘇亦齊・俄羅斯等の大邑あり西南より伊斯把泥亜波
尔杜尼尔・亦北海を渡り諸厄利亜あり是より於て卜那八盧
的を亡ぼして出―て戰爭止む時なく―を殃を被うる者な―
東の方を走きて翻て入尔馬泥亜と雖も波羅泥亜・和蘭と稱て
皆是より勝利和蘭の王父子諸厄利亜より遁れ入尔馬泥亜の帝

波羅泥亜さ―して出奔せり是より先伊波把泥亜を父子亜を
辛ふて孔部を父を戰敗れ―意太利亜より奔るこゝを名ハヘルヂ
ナンド自ら亜より渡り卜那八盧的を虚より―て擊てこゝを敗
る・ヘルヂナンドを擄―佛蘭察より將ひきて獄より繫ぎり遁
進ん―波尔杜尼尔と戰ふつ亜る之より繫―こと能はずして妻妾と率ひ
て伯西児と遁る按ずるに伯西児ハ南亜米利加洲に係る波尔杜尼尔人皆て併有せ―不なり 第那瑪尔加人々ユツ
ペンハーガより於て戰て敗られて亦齊國を・卜那八盧的を鉾
を避んとやこゝ以下の將と誘ふて己り闘とす是とカールルヤンと云
按ずるにヤンはヨアンの畧 卜那八盧的う是と謂ること実に神の如く皆人

意表より出でゝ古来未だ曾てなきの所為なり既より欧羅巴三分の
一を併吞し自ら帝と稱すこゝを以て伊斯把泥亜に対し〳〵こゝを以て
和蘭亜と〳〵明智ヨワツヘムミユラと西齊里亜及那波里〳〵
亜と〳〵こゝを以て羅馬のきるよ立川又勇あり此人軍旅
と事とせず世代遍れて羅馬よ存す（按ずるに羅馬は意太里亜の教皇の都府なりて世方ち牛
ろよ者板て影〳〵）而后ト那八盧的遠〳〵を伐出〳〵て手を〳〵戦よ服
従せしむと征伐せんとて自〳〵拾万の軍人の軍を率ひ入布馬
泥亜・波羅泥亜の二亜を過て俄羅斯亜よ侵入〳〵莫斯哥
烏と圍むも（按ずるに莫斯哥烏は俄羅斯の舊都なりて今猶都洛大壮麗なるよと風説書には莫斯哥烏の城市を焼付よ改〳〵て又くさ）
志うるよ俄羅斯人奇計を設けて血ぬ〳〵すして麋滅せん
とするを傍而立の穀を焼き又遠〳〵彼の糧道を絶ち都り
固く守りて彼をして附用とるさ〳〵を大雪降り積み酷寒
の到り来るを待ちこゝよ果〳〵て計策のごとく大軍
凍餒よ堪へず〳〵て死する者多〳〵にして於ト那八盧的を
消〳〵軍を還すとて俄羅斯人一時よ之を殺〳〵てこゝを
を彼〳〵又逐ずるこゝ大よ彼〳〵こゝ死するの勝〳〵計ふ
色〳〵こゝ死むとるをり俄羅斯人八是を逞るふ城〳〵して

皆焼殺さるゝト那八盧的ゝ之を〳〵敗走して波羅泥亜より
比利亜露西亞をカーレルヤンとは那八盧的ゝ部下の將ゝ
討つの〳〵ゝ波羅泥亜及サキセンの軍勢裏切せしゝは那
八盧的に双て驍勇なりと雖も前後左右より〳〵攻之
て拂郎察より帰るゝ之を為すこと〳〵ゝ（拿破侖我文化十一年の事）
なる〳〵初免和蘭のをウイルレム第五世は学漏生の女と聚
て世子プリンスハンオラニイを生めり今の和蘭王なり プリンスハン
謁ふ和蘭のをゝ那八盧的ゝ敗られ世子代率い〳〵諳厄利亜に在り〳〵時に国王女子一人あり〳〵男子なし〳〵
代世子と為〳〵嗣と〳〵ゝ女子に配せんと約す（拿破侖今から百八十年前和蘭のウイルレム第二世諳厄利亜のヤーコップ第二世王の女と娶り代付諳厄利亜嗣子之〳〵ウイルレム第三世外孫の故を以て遂に諳厄利亜の王となり和蘭と素ね治つ〳〵るすべしとなり）嗣後和蘭の世子ト那八盧的ゝ第和
蘭王を名そロッテウエーキナポレヨンヒ云の王を流るゝ能はず民服せしめて
遂に遁走して拂郎察に帰るを中ゝ自ら和蘭に到て精兵と募
ミト那八盧的ゝ勢に俄羅斯に敗られて敗北して敗けたるに
京〳〵て一千八百十六年（拿破侖文化十二年）諳厄利亜と合従〳〵学漏生プリー
ンスウエーキ（仏蘭西の王）蘭西・墨・諳厄と謀〳〵拂郎察に侵入すトー
那八盧的自〳〵大軍と率ひワートルロー地名と云るゝ七八里ふ云

戦伏せてこれを侯つこと月十五日初夜のころ戦始まる十六日孛
漏生と決戦してこれを破れり十七日東西勝敗を決せず十八日
朝諸ワートルローの大戦あり英吉利勝を得て軍路を進み入り乱れて
戦を挑む時和蘭の世子男と奮つて指揮すゐ忽ち流矢来て
肩に中れり疾流ほうれい尚奮戦せ〜ゐ諸尼利亞・孛漏生の
軍士和俱に力戦して大ホト那パルト盧的を殺れり（注）ホトは流説なり六月廿六日
ラスの陣にて勇戦し又ワートルローにて奮闘戦せ〜ゐ味方の勝利と博りとなり（注）和蘭の世子カテレブー
ト那パルト盧的たるを以て車
を走て疾走せ〜ゐ車は馬数疋と等しくして延
せ〜むること素捷ずと云孛漏生人逐すうつく既
に車の窓より出でさ〜入きて捕へんとホト那パルト盧的自殺せ〜

て躍出せ〜車と奔て走ること百二十里許把羅斯に及ぶ（掛ノ脚）
孛の都府なり尚逐ひて車を急ぐりホト那パルト盧的門を閉て殘兵を
陣せ〜和と乞ひ且こうを戦ふ〜俄に孛漏生人（注）孛は英吉利の
なるべし皆ことを請ひて降を欲て是より海岸さして
逐ひ走る諸尼利亞の軍艦数十艘既に海上に備へるを以
てホト那パルト盧的進退谷まり統小船やに跳り入り隠れとなれり主船
の名をイールトとユンホルトとして彼諸尼利亞の府
に將に使を厚く待せらきんと思ひたいあるて彼シーヘルー
イナ島（注）（シントヘレナ島なり）の房に設逐せられたり歐羅巴總州中二

十八年の年孔子より初て陸て平治せしかは入尓馬泥亞の帝
を波羅泥亞地方ふ出弁セ〜人なり及伊斯把泥亞國を名いへルヂナント拂郎察の獄中ふ繋れし人なり等安本
也を帰りて安坊す而〜て拂郎察の人新之の第年迎へく
以前のこと〜を立て〜也をとすす是ロワテウエーキ第十八世とす後
て法王の王命聞〜て伝姫と結ひ法令と定め自今而後
妻りを大砲一製する志あり〜は法王拳つ〜そ也と称爾丹
と国〜防禦〜ぬ先和蘭の世よの軍戦と大勲功と賞〜
入尓馬泥亞及拂郎察の人地を割ひ〜強ふ賞誉〜てコーニン
グレーキを爵たく〜むきてよ和蘭の地方めて右ふ後セり

按ふ和蘭ふ十七州起稱て子ーニテルランデンとしふ我文の中ふ彼金〜入尓
馬泥亞ふ属〜後ふ伊斯把泥亞ふ属セり此時伊斯把泥亞の守令を人を虐
使セ〜ふは法ふ乖を怨〜師を興〜ふ又オラン
エ也を戻さと也〜て是を撃けし〜ふは也勢大ふ活れり遂ふ我天正三年和蘭
七州の有を芸ふオランエ侯を推〜て王とす是をウイルレム第一世とす
て一致也とする此後伊斯把泥亞の人和蘭を攻て八十年遂ふ
勝を能すとく是ふ東ナかの地ハ大ま伊斯把泥亞ふ属〜ふ拂郎察と和蘭とふ
属セ〜ふこてふ初て十七州合〜和蘭の有と成り右ふ後セ〜ふり

為今和蘭の世よコーニング爵の後を郡〜是をウイルレム第一世と
稱す ウイルレム第一世ハすてふ天正中一致也り〜後ふ
今後ふ爵也とふり〜第一世ふ成れは舊稱ふ〜さく〜すとふり尓後
等して俄羅斯帝の女を娶りく〜夫人とす按ふ南帝アレキサンデルの女なり〜也を蒙
満生は入尓馬泥亞の後帝ふ〜て和蘭諸尼利亞ふ次ひて勲功
あり蘇尓安ふ王カールレル・ヤンは朝ふ後れく〜和蘭命令を嘗れり

ヒユルデンブルグ(ヘルトジ)の大公及サキセンのケウルホルスト(侯爵)共に爵を陞(ボ)し奴郷(サ)向
さる和蘭世子の爵を帰りしひ諸侯利亜(リア)の如き立て爵を与へ按(案)
辛セーカ(イシノバ)幾くしもるくして又辛す是を於くして入不馬泥亜(ゼルマニア)のプリンス
ハンワルレスと近くして嗣をとるす(ゼルは入不馬泥亜をよの対構なり)是(ゼル)ジョルゼ(ジョルゼ)第四世と
子高今の主なり我文政七年掃部寮(ランス)の(ロッテウヒーキ)十八世を辛す
第嗣を立す是とカールレ第十世と云ふ那今の主なり此改革このか
く衣冠の制度も法を多く改革しなり和蘭を同と令録
の徴を附く俄羅斯(ゴロス)の制のめしきこれも是彼れを倣
へく新くセーまはるを是より隨て新に制をせしく

手潤細なる服飾の如きは時に臨んで改製するとなり此国
今の主服は甲必丹(カピタン)を是服と実なるす此花色を用ひ同と
は先とは猩々緋と入れ左胸の色を浅の黒と附るなり

右是歳入貢の和蘭甲必丹(カピタン)スチユルレル(コトシ)子(サンフ)同と言へし
とこまく記くく級きるるなり甲必丹(カピタン)商年五十一家
とつふ十に家くく砲を成ものを十八隊を以て撰れ彼掃
部寮(ランス)の役を屢功あるくを以てユロ子ルと云官爵をも
授られ出身せくなり甲必丹(カピタン)職なりは最も上官なりとで
辛辛接話の際情くくして餘裕なくくして同と遣セー

と云多〳〵兵商時い和蘭の信尼利亜と睦しく交誼〳〵
俄羅斯と盟を結ひ。且該邦と和好〳〵鄭今其勢力
大に強て昔時の形勢とハあらさるを現識するに
堪たるのみ

丙戌仲月

景保記

別勒安律安設戦記

青地盈譯

第一勿能の會

西暦八百十四年文化十一年甲戌第五月三十日同盟諸国の軍隊ハポナパルテ
を把握斯に討て是を捷ち彼と戦て「エルバ」嶋を是亜爲島に放ち「ローデウ
ヒ」世十八世を再その國を定め諸国の〳〵拂郎察と和睦
〳〵諸国の軍を各本国に帰し萬民安坦の思を為りさて此年
秋同盟の諸王戻勿能に會集〳〵て和平の盟約を詳定す
〳〵て世九月二十五日さて魯西亜帝雪漏生を已に勿能に

人事ノ主元一等ヨリ降リ族会ヨリ溢れ野陣ヨリ出テ会ス又「ベイ
エレン」の女王「ウラルテンベルク」ガ弟ノ如キ王侯ヨリ来リ会シ十月
一日ヨリ法王の執事ヲ集リテ評議セシ所ニ此会議ハ
歐羅巴中ヨリ多ク来リ集レリ数月ヲ経ルニ能ハザル議定
ヲ為シ難シトハ思ハルルニ遂ニボナパルテ被配所ヲ逃レ出テ来ルト報ス
テ把理朝ヲ襲フ風聞アリテ会議ハ中途ヨリ衰廃シ同盟の
諸侯再軍ヲ引キ彼敵ヲ討ヘシトテ陳陣ヲ整テ此会議ハ
後日ヨリ延ラレタリ

第二「ボナパルテ」「アルバ」島ヲ出掃部寮ヨリ向ヒ

同盟の諸侯ハ会議シテ天下蒼氏の治安ヲ謀ルヨリ引キ
ボナパルテヲ「アルバ」島ヲ捨テ新ヨリ暴虐の人心ヲ起シ富ヲアルビヲ出
テ把理朝ヲ襲ハンの沙汰ヲ確ク人ヲ実ヲ為ス虐ヲ為ス嘆セ
ザルハナシ〳〵かくて又天下和平の日ハ幸ヨリ掩ハレ再危懼
の世の中トナリ如何ヨハ而十四年文化十二年乙亥二月二十六日の夜時
ヨリボナパルテハ舟ヲ解シ〳〵ヲ蒙異の掃部寮波羅泥亜克(ホロニアコルシ)西
岸ヨリ出ル之幸ヲ許ヲ率テ「ポルトヘラヨ」より舟ヲ出シ掃部寮
の南ヲカンヲス」ヨリ岸〳〵ヲ之朝ヲ「チレメブ」ヨリ掃部
寮の反陸「ラベトイエレ」ヲ経房ヲ率シテ波ヨリ房ヲ先ヲ出ヨリラ

ニよる強くて堂々たる九万余人に及び「子イ」ホの五尾皆彼
より後ひ者三月二十日の夕八時より把理朝より動るその途中人々と
て唱へ〜めりるハ此を再び入て三色の持旗を建て新に富士を
得て更に二千五年の兼義と抜む〜ところ初ローデウエーキ」三ハ
把理朝に在て自〜ならんと欲を辞さボナパルテ「羅五」その蒙古
のふ尾の羅と国人に説中〜て三年を集め彼を防んと欲すれ
ども弱〜却て三部下の三と奔て逃れ去られ三ハ論
ず〜十九日の夜把理朝の三城を奔で「ケント」に逃れ行こと勿論
八月三月十三日に於て此乱を治まりられ同盟の五度ボナ

パルテ」の法兵を奔〜人民を防害する罪状を挙て国人に解し
天下治安を図を為に法軍一同速に拂郎察に地向て兇賊を
退治すべきを命じ〜ぬ

第三「ヨクショベ」合戦

ボナパルテ「再拂郎察を治るを守えられ彩波ミユウト」
は彼時晴られ也に貪利の命を起〜意を星亜の法地を掠
ぬんとて部下の三八万を擁〜ふ三に雇隅瓦属都朝加城(トスカーマン)
属の地に乱入〜其土人を掠奪〜して手を下る者ハ国法を弱れ
自由の兼義を設せ〜むべ〜と云ハせ第四月三日ボログ

士の色よりなる翻式よりの討ちとして獨逸都のバロンビアンシイ色と
隔て是より向ひ戰ひるるシュラト」ろ勢よ敵〳〵難〳〵ボー河の色ヨ退
き〳〵ろよ那波里の色は「ヘラヨ」と過てオクショベロ」橋ひよ到る式
附ビアンシイ」はか勢の色と以てシュラト」と戰ひ是と破り逐よ威
と奮て勢〳〵よ戰ひ中月二日朝より東よ到りて彼と近拂ひ
〳〵よ二日朝シュラト」又寄集りしを逐よ大よ是と撃て彼ら云
二よと深よ〳〵煩炮數多と奪ひシュラト彼を〳〵て那波里
よ引返〳〵り

十四日獨逸都勢那波里よ入

トレンチノ」の戰(第の合戰を云)よ獨逸ろの軍勝利と以て大ろビアンシイ色
てカプエア」よ到りられい那波里の大ろデカテガロ」寄て和と請られ
ろビアンシイ」旨ヤ〳〵シュラトと和と講す義ろ〳〵て彼と逐
りれば又彼紙幣ユレタ」那波里の色と收め陣条〳〵那波里
城色獨逸都方のヘルデナント中將逃と屬す爲死約ま捕るか
那波里府よ向孔到りてカラーフナイペリッジ」支配下殘卒して
是を制ちるか為る事能ハ殘ル獨逸都の色と以て土色
殘卒完ま式日紙色ビアンシイ」は齋西里亜(シリア)の子レラポルド」と伴ひ
色二筋と以て那波里ホ入シュラト」の前と兼ねホ拂ろ察ホをり

を婦人の語尼利亞の船よりテリエスト」に送り来り以来後シユラト」
秋小克西西葉に接んとして事あるそれて捕つる「ヘルナント」
を命じて其を斬るるるん

第五 ベッレアッリアンセ」ウエルリングトンの勇戰

ボナパルテは把理勢に入て軍彼を敗るべき境界出て守
らしむアンゴウレメ」のヘルトフ」を以て拂郎察國南方の人
民を以てボナパルテ」を防んと欲られども彼の勢法を以て
迫て舟をセントに退きすかくてボナパルテも自分と「マイ」
の野に集りて熟慮するに其人数二万餘に過ぎず

遣ゆられと称る所調練の法を以て西方あるに八月十二日自分と
軍法紙〻和蘭国境に向ひ来り在字滿生語尼利亞の軍に
敵せんとして十四日夜に入るサムブレ河をカルレロイ」に渡り
られ字滿生方を攻て河りてフリエセル」及「ウエルリングトン」を案
伏すべきるに十〇日拂郎察の歩兵二万騎二万を法て俄
に字滿生方に突撃り字滿生の兵力と奮て
血戰を〻拂郎察方に利あ〻ブリヨンウエーキ」のヘルトフ」を
戰死〻大將ブルエセル」七馬より落て己に危きと幸して
救ひ去りたるかくて十七日も戰止す十八日の夕十一時すべアリ

アンセル」にて戰ひをるふ文のうち信尼利亞の一はうて血戰して
夕方七時ふ初り未タ勝負を決せざりしふブリユセル再字滿
生のうち軍率て居たふ敵の背後うち打あて此戰遂ふ大
勝利となる

第二ハ拂國軍の引ハ

此戰味方の血よ深し敵慶とうたるふボナパルテ軍勢をを
引て豫伍を乱さずして退るう雷鳴滿生の雲奮激して是を追
撃ふ由て遂ふ彼うの軍乱をうその途ふ煩炮裝藥車乘
車諸の器具とも此のうへくせるうの弾ちらしたりフリ
ユセル」ハ此夜の月の照るうると幸ひ敵を村里うり駆り出し
ーと命ーうの軍をもてベナツペ」ふ入りーふボナパルテ」の軍車
を奪ひぬ此うの紀ボナパルテ」ハ帽を脱ーー剣と失ひ狼狽して
遁れうビユステロー区人名幸ふーして彼ふ從ひうる所の拂
郎軍勢うう僅ふ四方ううりふしてあるー城壁の方ふ逃失
せうう此戰ふ味方ふ沿うる煩炮三百門餘あり此日ボナパルテ」
の本陣うう「ベツレアツリアンセ」と名くー岩の高如ふ動ーりホルストブ
リユセル」とウエルリングトン」此夜の大戰の後お會ーー互ふ勝利
を賀ーーてブリユセル」云るハ此戰うべルアリアンセ」戰と名けて

後までの記念ふ[illegible]なん

廿七ホルスト。ウレーデの兵「サールゲミュンデ」サールブリュ

ゲン」を攻め

同盟の強軍ハ者レイン」河より拂郎察ふ[illegible]フリユセル」及ウ

エルリングトン」は拂郎察の小境ふ軍[illegible]ホルストウレーデ」ハ

廿六月廿四日サール」河を渡て彼等滿生の軍と合し働んと

するふサールゲミュンデ」の傍ふて敵と[illegible]て遂ふ[illegible]

戰とのり味方ろサール」右濱橋ふ攻寄ん[illegible]敵ハ

サールブリユゲン」よて防キしら[illegible]ベツケルス」ヒよりて茶郭

と構こ[illegible]攻れ敵を退てたふ府中ふ押入り又ベイエレン」の兵

ハリユ子ヒツ」地を攻れりぬかくて廿八日ホルストウレーデ」本陣を

ナンセイ」の間よ[illegible]てメウルテ」及ムーセル」河濱の敵を攻めストライツ

ビエルグ」よ主敵將ラツプ」が把れ新ふ返る設を絶ち彼及敵將

コウルベ」を打破んと働くとのり彼るふ又ウユルテンベルグ」の王子廿二月

ふケメルスヘイム」より「レイン」河を渡[illegible]来りラウフ」とストライ

アツビユルク」ふ攻周ミコウルベ」をホウルリクブ」ヒユルクヘルド」子ウドル

プ」の要ふ[illegible]破り彼をフユニンゲン」城ふ退入らを純の絶え

フリモンヒ」は兵を里垂ろりシンブロン」を[illegible]来りビユプナ」は

モントセニス」と號し、常に彼方より攻入らんとす

第八魯西亞の軍カロンス」府を襲ふ

第七月二日魯西亞の紀元エセルニツエツ」は兵を聳してカロンス」府に入んとせしに小府人謀て此を敵とし防んと企るれば

エセルニツエツ」怒て兵を命じ彼が主意の敵對なす懲しめが

其人殺戮し兵を壞て放て乱入せしにその危殆恐怖の間うもおうしみとするのありし府中小三スメテウ」カウヒン」と云者ありて兵を家奇藥が入くるる

猶のユサツケ」魯西亞の豪族の名豪族と求め飢と疫ちんとし

入て兵を誘ふかその家人豪族及大酒をしふられ又ユサツケ」に兵を歸婦の眼源あり且歸のありし極と入て已が掠奪ふ意しるのみ〜んと憐しを記しフレデリキデラル」貨幣の名二枚を出し兵婦が手にその姻敵て兵を〜ユサツケ」に兵を〜かキを賜ひて〜〜と思ひ又十二枚を出し与へ〜〜と貴物兵と收メ〜アレキサンデル魯西亞の帝の名ハ貨幣しまずして〜〜ぬ〜〜府中の老氏ビリクテル」とつふ去額を制と〜〜血り深く途ふ傷れ〜〜ハ独のユサツケ」兵をとる〜〜忽ち馬を乘りて禍祥と裂て兵庭を踏躪し〜やりて組此を人〜を庭

まて所〳〵たり又絶えエセルニツエフ」ゴルを出る時郎かの一派
居の立ニカイセ」といふその絶えのるると何ひとう家の破壞され
る様敵さられでエセルニツエフ」見ず我過ぎ小船にて府人共立の
敵対とうゝ〳〵に周るとあ〳〵して自〳〵十二ジュカトン」貨物の名と彼小五へ
見は、エセルニツエツ」ゥ海小船を志くとて去りたり

第九月豆の諸軍把理朝小入る

ボナパルテは「ベ」アリアンセ」の放縁より第二月廿一日把理朝小帰り
動り自〳〵位を退きたる所翻として廿四日把理朝を出去り
たりさてフリエセル」及ウエルリンクトン」は勝小乘じ豆小乘じめ
敵地の諸城を攻撃〳〵第七月一日ニ小把理朝小入らんとす爰
小ボナパルテの殘壹ダホウト」ある事を聞〳〵て三回イスセイ地名の
味方の軍小寄無られども味方の兵見様打破られはダホ
ウト」カ為〳〵て降参して〳〵味方の軍兵悉を率て第
七月六日ニ十時把理朝小入同十八日ローデウユーキ」を也返り来り
廿四日満足を獨逸邦獨逸入本国の要地の邦名なり曾西亜帝小宮殿把理
朝の内小移〳〵ぬ始代把理朝再味方小属〳〵られ諸国の
方々〳〵代表のパルレメント」改厳の名の裏形すること諸軍小爰小帰り
たりたり

第十ボナパルテ諸尼利亞人を投す

ボナパルテは把握朝を為て第七月三日ボナパルテ（セポ）を乗せ利加に往んと欲し八日大船フレカド」を装ひ見方を乗り順風待つ所に諸尼利亞の巡海の兵艦見て攻さす

孤小月なるれとボナパルテ」も夜よりぞ遁れ出さやうふく十四日孤小角に小舟小をりべルトラント」サハレイ」ラレミント」等四十人計と従へ諸尼利亞人小勇戦投す諸尼利亞人彼小を撃ち七日トルバーノー」小到るその途中彼小の身の果て見んとて老幼駆群集し来り観るさて同盟の王族評議しボナパルテ」を

ハシントヘレナ」諸島に流竄らくさ小移り船将コウノビュルニ」の支配ノルトフエンヘルラント」船にて送せ送りぬ」とさ小諸島ハ

ベルトランド」及その妻子モントロン」及その妻子ガラースラカサス」等ゴルガント」及奴九人婢三人ゴ嗚呼等人を虐遇し等人小嘲り罵られる巨魁のボナパルテ」も終小ヘレナ島をとりて結果の地とし

ハ流罪の人ゴ

第十一獨逸邦の兵フエニンゲン」城と稜

フエニンゲン」城小敵将ホルバチノ」と戦ふ〜〜たるも寄せはアールツヘットフ」ヨハニ」来りて第八月十二日大砲と打無攻るに城中より

煙地を敷て防きゝれども味方戦捷るに乗じて遂に城に入る城つ及廊道狭隘ひ廿二日の夜より廿三日に到り城の外なる地を戦奪ひ終りたる廿四日書夜大地を敷て城を攻るに城内力尽〳〵白旗を揚て降を乞ひボルバチクレ」終章より九百とり生捕やて城を開て出られぬアールツベルトフ」降と交て城より入るその民ども各その分里に返〳〵本国ぶ日ニ」河の渡に遣りて平定して

第十二シントヘレナ海

此海は「アトランチセ」一名波尔杜瓦尔海ともの南西に位する巖礁海なし て地下の大坑ありと又西海の長さ「ユール」九里半幅三「ユール」九里高さ多〳〵「デイアナ」峯は高二千六百九十尺に及ぶ全島の平地僅に十二「モルゲン」一モルゲン九百三十坪なるを以て礁上に僅に生長して田園とする所七八「モルゲン」許は毛の礁石なり其田園を把潤るれば嵐甚駭敷穀稼を害するを防くるが為に人唯牧畜果蔬を以て自ら養ふ牧羊肉最美なり又野獣鳥禽多〳〵あり樹木に乏し又温泉数所あり附近に良美清泉ありとて一府「ヤメストウン」又ヤコブスタート」と名〳〵「ヤコブ」谷と云ふ所なり

その外ゝ海中の寄島平地とゝなれるも僅に二條の街路にて
その家屋は合衛の為に小ハ房屋を以て両附かいその
屋根葺て屋と称らるる数〳〵ヤコブスボクト」と名く海湾
ありホルトヤメス」の岩と要害とす海辺の破油の多れとせり
府〳〵七十戸の村落と称ては数こゝ弁とす代酒はゆゑ百零
二年（文亀二年壬戌）波尓杜尾尓のヨハンノーハ」始て見とゝ人出〳〵その日の
〳〵ナ」神名の祭日なる故以て神の名とす後ゆゑ百年代に諸尼
利亞人見聞する

第十三 和蘭の王子勇戦

第六月十八日ベアリアンセ」の戦に和蘭の王子ウワルトレブラ
ス二名ヒールスプロンジ」と云れて勇戦奮て敵を苦り法軍と
府〳〵当より伝る和蘭国の武威と輝せしは初め王子自
ら進て活〳〵敵を打拂ひ〳〵忽敵中に迷れ危うり
る所に抜打られハ衛入りカ戦〳〵て是戦ふその若戦の
間に流丸王子の左肩に当り味方色〳〵失色うり〳〵王子
是に障碍とす都て味方は勇奮激發〳〵て逐に敵を打
拂ひ〳〵遂に拂郎察方ゝ和蘭人の勇戦の逞さを感称せ
〳〵遂に此に由て王子の勇名を〳〵あらはれ剣に出さうり

ゐ〜金ゐれハ國民をゐを天の加護と好ゐる人〜とて崇称
いやゑ〜〜ゐり

第十ハ　ベレアリアンセ府

ベレアリアンセ府ハ是世上の知〜ゐる所ゐれゐも此度歐羅巴中
を再治平ハ沒セ〜〜大戰ゐりしに由て此府の名稱ハ最初
ハゐ〜ゐる為〜〜文惡虐統ハ幸とゐい天ハ永世ゐ閉ゐんゐ
ゐるゐ英雄フリユセル及ウエルリンクトニの二人ハ由て完成を
撃て再第民和平ハ動業をゐ〜〜ゐ心ゐ此府と同〜〜く
是打の名を待く人〜とゐて天乃若ゐ頃ゐ賛〜ゐ知し

むゐ此記ゐ〜ゐ見ゐ所ゐ〜て看ル者此と世復の寶とゐく
さゐものゐ〜ん

賛頌ゐり畧

畧解散人

拂郎察国王「ボ・ウルボン」氏世系

第一代「ヘンデリッキ」第四世王　紀元一千五百八十九年吾天正十七年国
吾慶長三年「ラハイル」ラクラ称せり　滅を伐討して位に即一千五百九十八年

第二代「ローデ・ウエイキ」第十三世王　「ヘンデリッキ」第四世王の子一千六百十
年吾慶長十五年位に即く

第三代「ローデ・ウエイキ」第十四世王　「ローデウエイキ」第十三世王の子一千六百四
十三年吾寛政九八年五歳にして
立

第四代「ローデ・ウエイキ」第十五世王　「ローデウエイキ」第十四世王の孫一千七百
十五年吾享徳五年即位

第五代「ローデ・ウエイキ」第十六世王　「ローデウエイキ」第十五世王の孫一
千七百七十四年吾安永四年

即位

紀元一千七百八十九年　昔定政元年　仏「フランス」「ローデウエイキ」第十六世
王立つて太者後度々之を由て国用乏しく百姓困窮を見
て於て国の三民貴族士庶法位なり　会集して国家安危のことを
議せ後の三民各分して堂を結び貴族の堂ハ主家を動け
士庶の堂ハ敵抗を一揆して降託一国内男婦を国
人遂に主政を廃し「ナチオナール、コンスチチユーション」国人を集て長官を建て奉
を聴く亦主を「ナチオナール、コンスチチユーション」と云ふ
一千七百九十三年　昔定政五年　仏政「ロベスピール」と云ふの落首を
アルて主及其妻人を殺して縉紳ハ殆ん殆ん殺尽す
一千七百九十四年　昔定政六年　国人「ロベスピール」を殺す
一千七百九十六年　昔定政八年　「ベルギヤ」と和せ和約を結ぶ
案の白盟の主として「ナポレオン、ボナパルテ」国事を行ふ
一千七百九十八年　昔定政十年　「ナポレオン」始めて上意を奉て法使
の所領を伐て之を取る国事舟師を率て「マルタ」島を取り沉
入多を伐討し「イリヂ、ランド」と云て「シントテーアク」の属土を
一千七百九十九年　昔定政十一年　仏「ナポレオン」既に多年より仏「ナイツトコー」ンド
「ウイーンド」を去て立て和のまを廃し「コンシエル」の官を上る

一千八百年　享和元年　十二年　「ナポレオン」「ラーステンレイキ」の兵を「コンゴ」に撃て大に之を破る上下意大里亜を亦る

一千八百二年　享和二年　「ナポレオン」「オーステンレイキ」と「アミエス」に於て和を結ぶ

一千八百三年　享和三年　再び英吉利亜と戦ふ

一千八百四年　文化元年　「ナポレオン」拂郎察帝の位に上る

一千八百五年　文化二年　「ナポレオン」意太里亜の王を攻て「オーステンレイキ」墨西亜同盟一し拂郎察に敵し真所屬の意太里亜諸地を奪ひ「ナポレオン」「ラーステンレイキ」の兵を「アウステル

リッツ」に撃て大に之を破る「ラーステンレイキ」は「チロル」「ヘヲチヤ」「スワーベン」の地を失ふ和蘭王を立て

一千八百六年　文化三年　「ナポレオン」「ナポリ」を攻て之を亦る

ヨセフ」を「ナポリ」に「ローデウエイキ」を和蘭王に封ず

一千八百七年　「プリユイセン」を代ち「イーナ」「アウールスタツド」「ビユルチユスク」「エイラウ」「フリードランド」を戦ふ拂地に於て大に勝

のみを得

一千八百八年　文化五年　以西把尼亜王子を誘ひて王を「バイオン」の地に幽し之を廃して之を亦り其

「ヨセフ」を対して以西把尼亜を与へ
千八百九年獨逸国を伐つ「ワグラム」地名に於て大に勝逸ス
帝「フランス」帝の「イルリヤ」の属地と其女「マリヤ・ロウイサ」を「ナ
ポレオン」に娶して以て和親を
千八百十年和蘭を兵を以て掛ケ帝の属地とし
千八百十二年「ナポレオン」将士として魯西亜国を伐つて大に之を敗
つ其都「スコロウ」を入て帝を都を焼き尽くす
之を命じて之を伴て走る兵軍を
千八百十三年雪際亜「プリユイセン」「オーステレイキ」魯西亜と相合
して掛ケ帝を攻つ「グロックス・ベーレン」「デンネウイッツ」「ブレイプシフ」
等の諸地を於て掛ケ帝を敗る
千八百十四年普西亜同盟の諸軍並に把理斯を取り
「ナポレオン」を「エルバ」島に流竄し「ロードウエイキ」第十六世の子「ローテス
ウエイキ」第十八世を立て掛ケ帝を王とし
千八百十五年「ナポレオン」「エルバ」島の配所を脱して再び掛ケ帝を
攻へ一王の位を命じ「プリユイセン」英吉利亜和蘭相合し
て之を「ワーテルロー」地名に於て大に破り「ナポレオン」を「セント・ヘレナ
島」に流竄ス

千八百二十一年五月五日「ナポレオン」ニシテ、セント、ヘレナ島ニ死ス

ボナパルテ氏傳

「ナポレオン」名ボナパルテ（姓）ハ地中海西加島（地中海ニ在リ仏蘭西領ノ地ナリ）ノ一貴族「カーロ」ノ名ボナパルテ」ノ次男ニシテ母ヲ「レーチヤ、ラモリニ」ト云ヒ紀元一千七百六十九年（吉ノ明和六年）ニ生ル「ナポレオン」天資豪邁不凡ニシテ聰慧大ニ人ニ抜ル所アリ父カ嘗テ伐ツヽ之ヲ「ナポレオン」ノ幼弱ナルヲ憐ミテ掛命案ノ属トスルヲ恥チ嶋ヲ去ンヲ欲セス故ニ是ヲ止ム嘗ハ十年一ルブーフ」ニ大番ニ入事ヲ乞ヒテ一千七百七十八年（吉ノ安永七年）資ヲ給シ

「ナポレオン」伯爵にして佛蘭西の一府「ブリー」子の軍学校に入て兵を学ぶ、「ナポレオン」年十七年例に従て試らるゝ「把理斯」（パリス）佛蘭西の王都の軍学校の進士なる時分年東て十七歩軍ラー、（ト）の煩軍の第二「リユイテナント」長官（ちり）撰むる此時佛蘭西国の政衰て百姓上を恐て一揆起る多し輝起一国の英傑者堂と結人て義兵を挙けて方々割據して「ナポレオン」をも多くの佛蘭西国を抜き「ピユフリーキ」（此時佛蘭西国王の名を離れ）一国の豪傑なるを以て一伍伍を「ピユフーキ」と云

ともに兵を「ピユフーキ」と云

伍伍「ナポレオン」を追ひ佛ふ「ナポレオン」挙族嶋を去りて「コルセイル」の地に来り居る時を伺ひ資用日々乏しく大に困窮を何とかして「ケルルニン」人「イオン」地を攻む「ナポレオン」之を無うして其部下の第四煩軍の長なる「イキ」「サルリセフト」「ミヘンチー」等官の人「ルラス」人名を推挙して煩軍の将帥とし「イオン」を抜く「ナポレオン」大に力あり千七百九十四年 寛政六年 改「ナポレオン」バタイルロン」歩兵隊の名四百人五百人を一隊とし兵を此時「ナポレオン」「アヤ」オ」の地 格爾西加を取て其地を

格爾西加嶋を攻た

進む功なし其翌年「ナポレオン」高地里亜国を侵し軍
を加へ煩軍の「ブリカーテ」の隊（六千人）の長となる時ナポレオン方
の兵力を疲弊せしめ「ナポレオン」第を四ツし戦屢利
あり遂に「ナポレオン」不慮の難に遇ふ之を「ロベスピール」（拝命）
（宗教の名別に傳あり）事を連盟して「ニツサ」の地に執らる秘
密たりて罪あるを以て赦さる唯高地里亜軍乃
官を「ナポレオン」是を進め把理斯府に
之て其罪あき城官に勅き訴へ少しとも聴き入る所
於て東都午前四時に徒人との願書を捧げ赤汗たり

須之にて把理斯府より於て官命に背き敵を欺く者
起り「ナポレオン」乃ち「バルラス」を手に属して是を討ち
一方此時より千七百九十七年（共和政七年）十月五日王の家族
等右の者に対して官に敵し「ナポレオン」対抗
難き之を平定「ナポレオン」千歳の如き国
て「チヒー」（歩兵一万二千人騎士千二百人煩軍二隊）の徳将に形る其翌年「バル
ラス」名之を「チリトイー」（徳官）に奏上して高地里亜軍乃
徳大将を羅んづ「バルラス」又故大将「ベアウハルノイス」を
人「ヨセヒ子」を媒して「ナポレオン」を嫁せしむ（頗

る富有にして却て人民ハ多年「ナポレオン」の和と称する「ナポレオ
ン」を多く信じて意を用ひ里亜の庫和より多くの兵を北伐敵方に
も「プロシヤ」「ステンレイキ」國の兵八万人「サルゴニヤ」國の勢六万人共に
其精兵三万人教皇より兵三万人「ニヤリヤ」國王より兵八万人以上
二十八万人なり拝命常万にて八月兵五万より過きて其
軍中報ずるに諸軍敗亡一芝居くらい見へ
「ナポレオン」義を到り士卒と命一番砲を発し度と
全戦を力絶ち千七百九十七年三月十日「ミンテノワラ」
地名の戦みたち続て翌十二日「メルレンモ」「デーゴ」以上地名の戦

を勝利を見る「プロシヤ」「ステンレイキ」と「ピーモント」の西敵兵
引離すして和合せしめ「ナポレオン」遂に其軍
を敵の軍中に入れ同月廿日「モントーイ」の地に於
王命を尚勝を乗して敵地後の四月十八日「ホベニ」地名
の兵と戦ひ其つ此に於て敵より和を乞「カムポルニ
オ」の地に於て和議を結ぶ是を由て今度切取る所の
「ヨチヤ」境内の法化を「プロシヤ」「ステンレイキ」に与へ
て「プロシヤ」「ステンレイキ」領に和蘭地と拝命案の引取る
其後「ナポレオン」英吉利亜を伐へ一事に専に指揮を

地に多く民人多国と伝へられ「ナポレオン」
千七百九十八年（寛政十年）五月十九日軍艦を仕向て精兵三
万人を率て「トウロン」を発し途中より「マルタ」島を降し
「アレキサンドリヤ」の地に到着し此府を無三之に奪ひ次
に「カイロ」（地名）を攻め是亦敵兵八百一日英国利垂の大
将「ネルメン」不意に舟師を率て「アレキサンドリヤ」に到着し拝
府塞軍之と防戦す雄戦「アビユキル」地の戦に拝
府塞の軍船大小悉く焼き逃て「ミルダ」島に帰る舟艦
合二艘ありしのみナポレオン此戦の負なり。また傍く九
月より都尓格の兵数隊「ナポレオン」少し退き之と
戦ひ大に敗て尚進て民人多の地に攻入り
果敢き情なし味方の大将「デサイクス」「セドニン」の地
に行く「ミラフト」「イ」（都尓格の軍と戦ふ之を人名）十一月
二十一日ふ「カイロ」の地に行て「ナポレオン」住て是
を攻む十二月九日「カイロ」の孔猶大きくして「ナポレオン」兵
一万二千人を以て此地に到り之を平定し「ヤウセ」の「ラド」、
「エンゲテ」と共に陸地固め夫より「エルアリシ」「アサ」「ハ」等の地を暑
一翌年三月「アシ」の地に此附近土人ふ反逆し

八月廿七日ノ兵庫ノ戦ニ敗シ病ヲ生ジテ死ス
六月十四日「ナポレオン」ノ為ニ此ノ都市ノ城ノ
キル」ヲ着ケ城ヲ奪ヒ「ナポレオン」ハ都市ノ兵ヲ
再ビ城ヲ攻ル(ニ)ハ此ノ多ノ役人ヲ殺シテ止ル
ニ至ル抑モ革命ノ発シテ以来利害ノ感盛ニシテ「ジロンド
リーキ」党ト激烈ナル注進到リ特ニ「エイエス」人ノ命ヲ
テ「ナポレオン」早ク帰ルヲ待チ其ノ利害ヲ説キ「ヒユデリーキ」
ヲ活護セシメ「ナポレオン」其兵ヲ率ヒ
「ルベル」ヲ死シ八月二十三日「ラヒヲス」「ミユラト」「ベルチエル」「ルモント」

等ノ人々ヲ窮ニ発シ十月九日「ルエス」ノ地ヲ陥
シ同十四日把理斯ノ城陣ヲ此ノ時把政斯府人「ナポレオ
ン」ノ使ヲ迎ヒ迎ヒノ人ハ悉ク殺ル
殺ル知ル所ニ和解ヲ「ナポレオン」
ニ至ル把理斯府ヲ帰ス舊執政ノ輩ヲ殺シテ「ナポレ
オン」ヲ立テ大統領ト西暦千七百九十九年
去ル実ニ十一年十月廿「ナポレオン」遂ニ四政ヲ改革シ国人之ヲ
服セシメ之ヲ行フ旧執政ノ輩ヲ死ニ
の親族等「ミントンロウド」ヲ別宮ノ名 把理斯近ヲ
ヲ命ジ其ニ時ヲ

人執政等ゝ為大ク軍を立ツル候ジ「ナポレオン」
後多の「グレナジール」武士を率ゐて上り「ナポレオン」と共を
率て宮ゝ「ナポレオン」を襲ひ「ゝ方頃と抑人短兵を
接せるの大なり「ルー、ヘフ」先ず一人のグレナジール武士を率て集て
ナポレオンを抱上之を傷て「ミラット」ナポレオンの妹夫其兵士をして
其事ゝ「バヨネット」を刺もて衆を敵ゝ為たり其
翌日「ナポレオン」、猛心の執政官等相集て「ナポレオン」
「シエイエス」「ロゝチニス」三人を立て三の「コンシュル」執政の名を
十月十七日名を改め正ゝ正式を行て之れを法令を作ル十二

月十日国中に布告「ナポレオン」八十年の前「コンシュル」
の官を置ゝ事を容ゝ「カムバセレス」「ニブリユニ」二人をん
て其代ゝ新ゝ市に意を定て斯ゝ市に意を定て猶
逸普西亜「ナポリ」部を指れ人々一て拝市案の不欲と侵
一英吉利亜八拝市案と絶高を第「コンシュル」「ナポレオン」
精兵を「デイオン」の地に集め千八百年春の終「ベルハルド
山を越て意太利亜の地に到る六月四日「ミラーヲン府に入
りて「キスーアルペイン」の所を侵略て時方の敵「モレヤウ」
八猶逸の地に攻入ゝ市ゝに「オーステニイキ」の兵我欲「ゲニア」

城攻略を企て「ナポレオン」是を国境負担を決し（きそ
六月十四日「ニーゴ」の近傍「アレキサンドリヤ」地名と「トルトナ」地名より合
乃手始めて再び劇き合戦となるも衛兵の為に破られ
さて又一つ遂に排兵案京市の傍ともなる是に於て敵
陣を捨ひ十二日上之を撤退して和議
を結ぶ「ナポレオン」其兵を「ミラノ」に於て凱旋し
直ち把握新に伊国を「ナポレオン」の傘下
牧ふこと多し雖「ナポレオン」今度の捷ち勢に霸心
此時長ずるに及ぶ故に之を抑制せんと欲す

とのあるを以て之を勇気を奮て敵を破り命令に
「ナポレオン」は報を詳一今を以て之を国
を多八十度を奪ひ是に於て敵を蹴き全滅と
千八百年百万を以て廿壹百年人を捕らえ四七人の死
刑一等を減じて流罪とせり「アルナ」「セラ」等人最和の係
百年無せしむ故に伊太利国中
波斯將之帝して民兵を率ひ
遠く是を攻むと雖
事十年盟約を
兼て北亜墨利加州の「フルヤーラ

デ、スターテン」国名と互市の約を定む「ヲースステレイキ」きたるよ「モンアウ」の約 拝命案 を撃きたること千八百一年百九月「リユヒル」の地に於て「ヲースステレイキ」と和を結ぶ「ヲースステレイキ」「イン」州の左岸の清地和蘭地に於て拝命案を百三十八日西こりやの主と和を結ぶ七月十七日教皇と「コンコルダート」法官の事を定む九月九日「ドリット」に於て波尔杜尼尔と和を結ぶ十月一日「ゴート、ブリメニヤ」と和を結ぶ同八日普魯西と和を結ぶ十一月九日把理斯府に於て共平の大事あり諸民勤年にして皆義を結ぶ其よ

於て「ナポレオン」諸州諸子を率ひ軍艦の修理新開地の事を命令して千八百三年一月「コンスエル」の国案を率ひて「イオン」の地に到る「ヒ」「スアルベイン」の沿を以て意大里亜の沿を三月二十六日「アミース」の地に於て再び「コロートブリメニヤ」と和を結ぶ其よ於て王人皆ナポレオンを以て突あるとし共に多数にして普人日清官和蘭人日清官再び伴て「ナポレオン」みコンスエルの官の朝廷を以て拾年を定む公日清官再び伴て「ナポレオン」「コンスエル」終に「コンスエル」の官を為すと雖ども自ら七日の諸官人等「ナポレオン」を以て「ナポレオン」の国のと奉る「ナポレオン」是

於て備前の下津井を攻め遂に降服せしめ九月「五島」
をして拂郎西案の領とせんと又「スイワセルランド」を攻略せ
ーモント」をして拂郎西案の那縣とせんと我が国伝を刻責し
士民の伝説を生じ新たに英吉利亜人を加へ拂
郎西案戦地に「ナポレオン」の軍艦多く集り一挙に渠
を滅さんとせしが武せざりしも英吉利亜の切なる故
を以て八百三年月西暦を以て戦を交ふ「バーベル」偶逸国題中一番
西湾を持ての地名なし所謂「ナポレオン」地の和睦もよ国名「バーベル」刃を
交ふ「エリゲル」

四、もとして拂郎西案の降り兵を大砲兵隊を馬を
走り拂郎西案に渡らしたる英吉利亜の兵を
拂郎西案常ふ利を以て之を攻つみ拂郎西案の屬する物逸
伝地方を以て侵略を深く英吉利亜の兵戦傑きあり拂
郎西案切もてハ「ナポレオン」を略を四し千八百三年六月廿日
先の英吉利亜の貿物拂郎西案の封鎖を厳禁
ーフ廿伝滝すなわち「ハンレ」より「ナステ」をもて舟を集
めて英吉利亜を襲ふ「キ用之を列」之「トウロン」なバ脳多
軍船を備へ英吉利亜と拂郎西案共に相逸地方

救那比港弟ニエルハ島「ウエセル」島を執始せし・也然るに拂

郎察国ニて千八百四年二月廿七日諸侯の陰謀發し

多くを其張本人ハ「ヒセグリユ」「ゲオルゲス」なりしが是らと力をし「モレア

ウ」等守ニ人追ヽ于逮捕へ是等ニ其罪の事ハ他を予求

エありしが弟子英吉利亜の使者及ひ獨逸比「アゲント」

館帯ちを密交せしと評すとのありし八兵を三千にち

「コーウリンコウルト」を總ねとして三月十四日「イ二河を渡り「バー

デン」「エツテ二ヘイム」の諸地に伸し「ヘルトゲーエンゲヒーン」ト称する人是

を把理斯府に送り二十日比兵軍府ニ於て之を戮殺せ

魯西亜弟ニ雪際亜より拂郎察約を背く諸大臣を

誅せし氏事を責めしも拂郎察ハ英吉利亜の

使者「フランシスダラケ」ハ「ミユンセン」の地ニ於て之を保せし「スペンセ

ル」「スミツト」ハ「スチユツトガルド」の地ニ於て之を保し明徴なと

挙て是ニ答ニ之人為き英吉利亜ニ罪て其の由を告

と英吉利亜みて彼之人譲はせてさりと言ひこ叶し

たり然れとも此二人を全く隠謀あきにありに

把理斯府ニて八内外争乱止みさるハ是を萬世の主あき故

との議ありて千八百四年三月卅日ナホレオンを以て皇帝と尊

事を定む諸部ハ太守是を把理し新府ニ来り会す五月十日
執事一統の與ありしく廿日に国中ニ及ぼしもまた定さしむ
者を謀りし諸将「ピセグリユ」ハ四月六日獄中ニて殺せられ「モレ
アヽウ」ハ謀者を知ると雖是を加ふへきもなく禁錮ニ処し
をぶ出し又一旦放減して亜墨利加ニ流竄せしむ「ジヨルジ」
等此九人ハ誅せられ其余ハ赦されて或ハ禁錮せらる「ナポレオン」ハ
死刑を発せしかハ此度帝位ニ即くを総称く窺ふ者ある
業ありけり「ナポレオン」すてに帝位ニ登りて益覇業ニ日々
長し従欧羅巴全洲を平呑せんと欲する此志ある此時払郎

西兵最強く国勢日ニ盛なり諸州の兵革ニ悉く其君長を
地を争ひ此帝号を之を称す「ナポレオン」其力を伸る事を得
るなり十二月二日教皇より冠を得るの式礼ありし「ナポレオン」之を
意太里亜国ニ於ても又王として此地ニ至り「ピエブリーキ」国王なき治まり
の治を廃し千八百五年三月十五日意太里亜王を兼る事成
客ま府是ニおいて其養子「エロウゲニウ」をして意太里亜乃
下王とし其妹「エリサ」を「ピオムビオ」の女侯ニ封し「エリサ」の夫「バツシ
オツク」城「リユツカ」の侯ニ封し「ゲニユア」「パルマ」「ピアセンサ」「ピーモント」なるもち、城
々く払郎察の郡縣とし「ナポレオン」意太里亜より還るときニ

み「ラーステンレイキ」ハ英吉利亜墨西亜と合して拂郎案、
瓦地「ナポレオン」九月二十五日レイン河を渡り「バーデン」「ウエルテムベ
ルグ」「ベイエン」国名以上と合一共に「ラーステンレイキ」と戦ひ屬ち逐ひ
「ラーステンレイキ」の境内に攻る千八百五年十二月十三日サ和「ミュ
ラット」「ラーステンレイキ」の都府「ウエーチン」城而る「ナポレオン」ハ「ス
コンブリュン」府ふ一り十二月百曾西亜の兵を「アウスタルリツウ」
戦つて之を破つ翌年に於て「ラーステンレイキ」帝我軍と講
り十二月廿五日「プスビルグ」に於て和を結ひ諸多の屬地を
失て拂郎案ふ「ベイエレン」「バーデン」「ウエルテンビルク」三國名
地を捨て其功を賞して王爵の國とする「ブリユセル」國
ハ和を乞ひ「ハイエル」の地を拂郎案ふ英吉利亜
と絶交し千八百二年拂郎案帝「ナポレオン」其姪益國家
アリ且其國人大幸せを与を上つる「ベイエン」王の女「ナポレオン」
の養子「アウストルナイス」を嫁し「ナポレオン」の夫人の姪ハ「バーデン」乃
世子を嫁し其姉妹「ミュラット」「クレベルグ」「ベルグ」両地乃國公を新
セラる「ナポレオン」の弟「ヨセフ」城「ナーペルス」「シリヤ」両地乃王り
新に「ヘルチヤ」ハ拂郎案の部縣となる「ナポレオン」の時「パウ
リナ」「キユスメラフ」の地を与へ「ルロツクス、ミニステル」館「ルチ

ル」より「ヨウ（アテル）」の地をもみ（「ナポレオン」の父「ロウイス」を和蘭國王に封ず「メルレイランド」「ベルナドッテ」の二人を「ルトーゲン」國「ーゲルホーフデン」館「ミニステル」館公）名ともに其實且是を以て義を
ゆり此地拂郎察をみな国と共に事者
等やり千八百二年七月「イン國盟の諸邦を建く「ナポレオン」
之を盟主と称す七月二十日「ヨーステン」イキ帝「フランス」羅馬
獨逸の帝位を奪ふ「プリユイセ
「」獨拂郎察を抗ふ拂郎察の軍を「イーナ」
と「アウエルスタッド」を破つ大みな人つ世界の都色ミ

那拂郎察の地とする所「サキセ」國ハプリユイセンと絶交く
拂郎察より降る「ツセン」の「ケウルボルスト」國公の八其國を
地をなる地を拂郎察の領とする「ナポレオン」十月廿七日
「ルレイン」を入る十二月一日其属下の清を帝を一英を利
亜と貿易を通伝をもと海を拂郎察帝
「ポーレン」を拂ひ「ユイセン」を破つ「ポー」この旧地を恢復セ
全く北附普西亜「ーステニレイキ」プリユイセン
三国「ポーレン」をとる
拂ふ千八百六年十二月廿八日「ユルトスク」の戦み秋の軍普霊
を破り大多人つ世界二年二月七日八日我の軍みナ

普西亜を「エイラウ」み移る之此頃普西亜も都を移し戦
あるて其間頗る疲弊なる所より我軍傍て之城「イルスベル
ク」「オストロレンカ」「リーゴフンド」等の諸地を攻て撃破多し八普西亜
兵小「プリユイセン」陣を毛ひ七月廿八日「チルシット」の地にて和を
結ふ此時「プリユイセン」八国「四百方」に并み許多の戦貨最上の邑城
を拂ひ寄に与ふ「ベルトリドム」「ワスカウ」八「サキセ」国王の地なる新
王国「ウエストメール」ニハ拂ひ寄帝の妃「ピロミユス」の地となる
此「ピロミユス」ハ「ウエルテンベルグ」王女のまなる「ナポレオン」把理新府
み競陣し千百七年十月廿七日以私把泥亜と「ポメイラフルアウ」

地名小寄會し此年杜尾年を伐つ其地を多人と約し遂に
此年杜尾年を伐つ其地を多人と約し遂に
遂に之を奉せんとす「トリユリヤ」を并に之書会をなして
英吉利要の互和を拂に千八百八年廿一日「ケル」「ガステル」「ウ
エセル」「ブリンゲン」等の諸地を并に此時以西把尼亜の名
「ナポレオン」国王「ヨセフ」を以て以西把泥
亜王とす 寄る以私把尼亜ニハ「ルイ」国王「ヨセフ」「ナポレオン」
亜王とす 寄る以私把尼亜ニハ「ルイ」国王「ヨセフ」「ナポレオン」
一説ニハ「ベルギナンド」と云て「ヨセフ」国と称す
ナポレオンと私把尼亜と呼之を因以私把泥亜と称して之を取共
姉夫「ミユラット」をナポレ国王として「ゴロート、ハルトクトム、ベルク」国名を和蘭

西班牙「ローテウエイキ」村ナポレオンガ弟ヨセフヲ以テ西
班牙亜拝弗国案の願ハラルヲ快ヨシトセズ兵ヲ発シテ之ヲ
攻メ「ナポレオン」十月二十九日以私把尼亜ヨリ発シ一挙利要
兵ヲ率ヒ大ヨセフの兵ヲ破ル「ヨーステンレイキ」帝フランス共和
政体ヲ廃シ大ヨセフヲ王ニ我ガ属下の位ヲ与ヘ「ナポレオン」
之ヲ賞シ西班牙ヲ攻ムル事ヲ千八百九年の春九月「ヨーステンレイキ」
の兵ヲ戦ヒ大ヨセフの兵五月十日「ヨーステンレイキ」帝ウエーテル
府ヲ陥ル七月十日兵ヲ休ム後ヨセフ十月ウエ
ーテルヨリ和蘭ヲ攻ム「ヨーステンレイキ」帝後日の城邑を
戦貨ヲ以テ拝弗国案ヲ以テ姫の「ナポレオン」の妻「ヨセフ」
子ヨリ数ヘ千八百九年十二月十二日之ヲ出テ事ヲ為ス
ヲ於テ千八百十年三月十一日「ヨーステンレイキ」帝の女「マリヤロウ
イセ」ヲ以テ妻ヲ「ヨーステンレイキ」の「アールハルトーザ
ン」女公の名ヲ封ヲ意大里亜の「ヤ」ヲ「フランクホルト」の大公ニ封テ「ハ
ー」「ルウエストハー」「ヒ」ヲ共ヲ一国ヲ立テ一月一日和蘭ヲ「ヨ
セフ」ヲ発シテ英国ヲ再ビ拝弗国案の邪説ヲ以「ワルリウセ
ルランド」独逸国内「イシ」海国盟の法ヲ為ス「エムス」「ウエセル」
「エルベ」以上「イシ」河の名の為ニ存ル渉地「ハンセー」の諸縣「オルベンビエルク」大

公国（ベルク）の一地名なり「ウエストバーレン」の一地名なり本篇の部隊
なる「ナポレオン」なり其歳の頃上書す所羅巴洲の全
を考編せし部もるとのを以西把尼亜英吉利亜魯
西亜なり千八百十年魯西亜及雪溝亜と共に我が兵利
あり是に於て猶逸中にある雪溝亜は地名は「プリユイセン」の
諸侯地「ダントレ」男爵に属せ猶逸并び「ホーレン」の諸地おな
して拂郎蘭に属し魯西亜を成るを弱し「ナポレオン」
青月九日拂郎蘭の「シントコロウド」を発し六月廿四日九日「ニーメン」
河を越（九月十五日）「モスコウ」府は乱して都悉く焼失せ

ざる中家に止る事を得ず且つ其大軍却て過度
なる十月七日モスコウを退き「スモルゾ」の地に到る家又拂
郎蘭に於て「セレット」人名「ポロ」を捕へ「ナポレオン」
其兵を「ナポリ」国王「ミユラト」に託し為き家を発し十二月十八日
把耳斯府に到る時に以西把尼亜も乱起るを「ナ
ポレオン」は「ルイ」国人の意を汲み「ホンメイ子ブ」マウ
の拂郎蘭の地を出て「ベルリン」の地に到る数日を過ぐ千八百十三年一月廿八日
「ミコルダート」教皇と聞く法使を以て「ポンメイ子ブ」マウ
兵を出す「ナポレオン」は三月五日「プリユイセン」
「ナポレオン」之を聞て猶逸乃

一方ハ進ミテ「青」百「リユワトセン」ニ於テ大ニ之ヲ破リ
ヲ傷ケ其ノ「バウトセン」及「ウルセン」ノ兵ヲ敗ヒ之ヲ
追ヒ勝ニ乘ジテ「ロシヤ」ニ於ケル「ダキウスト」一旦都化
トカヘタル「ハビエルグ」ヲ再ヒ攻メ二月晋ナシタル兵
ヲ以テ「ヲーステレイキ」ヲ「フラージ」ニ於テ和戦
講ヲ結ヒタルトキ和戦ノ日「ヲーステレイキ」ノ兵ハ
ヲ「ヲ」ヲ撃「ヲ」オン」ヲ敗ヒテ「デンスデン」ノ地ニ於テ之ヲ
走ラシ此時侍方ノ大將「モンタウ」大剣ヲ揮ヒ兵ヲ「ナポレ
オン」最後ノ捷事ヲ収メリ、自五百「カイバツカ」ノ戰ヒ

此時都將「リユウセル」指揮ノ案軍ヲ撃テ大ニ之ヲ破リ二十日
侍方大將「ビユウトキウト」ノ總軍ヲ慶ビ(勿)雪降亜ヲ
兵ヲ率ヒテ案軍ヲ到リ指揮ノ案軍ヲ破リ「ナポレオン」
九月百「デレマテン」ノ地ヲ退キ「イプレフ」ヲ奪ヒ敗ヲ当
案軍ノ軍勢ノ多キ十月十二百、都ヲ合ハ天ヲ好機ヲ
九月討ヲ残ル件ノ僅ニ大兵ヲ以テ兵ヲ「イン」河ヲ渡リ退
き「ハラウ」ノ地ニ都ヲ過ヒ「シントクロウド」ヲ経リ到
る千八百十三年十二月一日同盟ノ諸王「フランクフルト」ノ地会集
シテ「ナポレオン」ヲ「ヲ」ヲ「ヲ」ヲ時兵「スウイツセル」ノ地ヲ

ナセサン」と称シタルハ之ヲ以テ
「イン」河ヲ渡リ来タル英吉利軍ノ大将「ウエリングトン」ハ
「ビレイ」山ヲ越エ来リ「カロンヌ」の原ヲ伝ヒ此時「ナセ
ナン」ハ「シンヤ」ニ因リ以私把尼亜王ヲ容ヒテ王ト和睦
ス同ク同盟ノ諸侯ハ和ヲ乞テ獨歩ヲ為ス
自己ノ大勢ヲ保ツヲ得シ翌千八百十四年一月
十九日把尼新府ヲ引去ル之ヲ以テ防戦セラルル二月ノ
「ブリエンヌ」ノ大会戦ニ負ケ此時佛和ヲ乞テ欧洲
ノ公利ヲ僥倖ニ之ヲ拒ミ遂ニ春

此日欧全く佛帝拿破侖ノ強横ヲ憎ミ「モントニルト」ヲ以テ同盟ノ征軍普西亜帝并ニ「ブリエ
イセン」王ヲ迎テ把理新ノ郊ニ戰ヒ雖ト敗ルトモ三月廿一日和ヲ乞テ把理新府ヲ攻
ルヲ以テ此時「ナセナン」ハ「エンタイチブレアウ」ヲ以テ欧洲ノ
国人ヲ全ク置「ボナパルト」帝ヲ拒ミ帝ハ位ヲ抗シ再ヒ之ヲ
「ボウルボン」氏ロテウエイキ第十八世ヲ位ニ即ケ翌十一日「ナセオン」退
位ニ元ハ島ヲ以テ欧洲ノ所有トシ「きの」の書ヲ以テ此ヲ
欧人ニ附与ス二十八日「フレユス」の近ニ流サルヽヒトラ「アウ」より

乗船して「エルバ」島より発し「カンヌ」に上陸し「ナポレオン」堂々帰る勢にて既に多くの人心動揚せり実に世界中一大変動なり

セント「ヘレナ」島に「エルバ」島の到着を聞き寂寞として安眠を全く排し案国君臣未だ輯睦せずして士卒花三度民等「ナポレオン」の徳政慕ふものの多く二月四日に出発後等の「エーター」に会集せしを聞き千八百十五年二月廿六日廿壹兵千夏と共に舟を乗じて「エルバ」島を発し三月一日「フレユス」の港

に着し「カンヌス」に到着せり其時兵隊の人民「ラベドイエル」人一隊の兵を率て之を防ぎ「ナポレオン」を津巻し其兵を分て共に「ベルバ」府を又ルナ「イナン」府に下り其中に「ナポレオン」の命令を「ローデウエイキ」に宛て世連の把理斯を棄て、逃去り此事「ウエーター」の会集にて人民の信用の強き、我慶成此時の「ナポレオン」一隊の未兵を以て「ナポレオン」方にても其勢明らかに怖長し二月十三日「サムブル」河を渡りてブリユイセン」並ぶ利亜和蘭北兵を迎へり北部方

の總數ハ「ウエルリングトン」「ブリユツセル」なる七十二百「ブレウリユス」と「リゴ」の過て強き敵と為るを恐れ「ナポレオン」勝ちに乗じ又「ボルヒ」の「ヨイ」ハ九萬と為て「グウトレブレス」の傍に陣し「ブルツセル」地名の道を守る此時「ブリユイセル」の軍すでに敗走し小川英吉利亜北和蘭軍此一戰を逃きソイグヲル林の傍に陣し「ナポレオン」の敵を待つ大將ブリユツセル」を為て後詰をなすを待たり「ナポレオン」をしてい初て英吉利亜の陣「ブルツセル」の陣をもみるとこ思ハワーテルロー」の高地にて無二無三に英吉利亜の將「ウエルレングトン」を衝くら和蘭の

太子ハ「ブリメニア」と和蘭の兵を率て之をみる間に敗「ブリユツセル」不意を以て攻撃し戰鬪くして火花を散ちこれ和蘭の手を奮ひ敗績列を乱て把部隊引去り此の勢に乗じ佛国案大敗績「花サ將ソリグナリ」多くの「ナポレオン」ハ「ルイ」を捕ふ「ルイ」を逃れ去り可き勢に乗じ王位を失ふ儀を「ルイ」を逃れ去り可セホルト」を従へ家を乗船して亜墨利加洲を逃げ去ん人とセ一ヶ共英吉利亜の船を奪ふ逃去るを也も遂に七月官英吉利亜の將「ヰイトランド」を身を乗ね

角り女翼「ベルヒロール」と云船に乗りて基督利亜に送
られ基督教を説き用いられてレント。(レナ)山の麓に流れ出る
「ナヒオン」島中ロウグ。ウエト」と云所に押込まれ基督利亜
の使徒厳しく之を守る基督信徒にして千八百二十一年
五月五日病死し奉り奉一九ヶ月「アベル」大将の家
若を以て女遺言せられ此年一歳でる